

総目次『実録文学』（文学案内社）

『フェンスレス』オンライン版（第三号）●特別付録
資料1

第一卷第一号

昭和十年十月号 一日発行
—十月創刊号—

一、雑誌名に添えた年号は創刊および終刊をあらわす。

一、細目は目次からではなく本文から採ることを原則とした。また、副題も探ることを原則とした。

一、仮名遣いは原文のままでし、旧漢字は新漢字に改めた。

一、作品のジャンルについて、*印を付して題名下の（ ）内に説明を加えた。「実録文学」の性質上、小説・随筆・評論の境界は曖昧だが、可能な限り腑分けした。

一、作品に執筆年月日などが付されている場合のみ、「擱筆」として本文のままで注記した。

一、広告のうち、文学・演劇・映画に関するものだけは内容を注記した。

一、文のままで注記した。

〔表紙〕

〔広告〕^{*注2}

〔広告〕^{*注3}

〔広告〕^{*注4}

創刊の挨拶（*巻頭言）^{*注5}

江戸時代実録小説の分析（*評論）^{*注6}

郷土史家に告ぐ

実録文学（*時評）

わが自叙実録（*隨筆）^{*注7}

鷗外さんの態度その他（*隨筆）

森鷗外の実録文学（*評論）^{*注8}

目撃せざる実録一千両首のすげ替へ—文壇御歴々が文芸懇話会賞当選者島木健作氏を闇から闇に葬るまで—

成田 仁平 三六一三八

三九、四四一四七、五九

—「偶然性」は借りもの、トンチンカン、夫婦喧嘩の妙薬、〇ヒマシ油とヘマシ油、梢風老牧の墓参り、川口松太郎自祝の会、忠犬マイの死—

文壇・実録（ヨンツブ）非実録

—「偶然性」は借りもの、トンチンカン、夫婦喧嘩の妙薬、〇ヒマシ

油とヘマシ油、梢風老牧の墓参り、川口松太郎自祝の会、忠犬マイの死—

『実録文学』

*注1

昭和十年十月—昭和十一年四月（全六号）

実録監獄部屋物語（1）（*評論）

大島浪太郎 四〇一四三

吉川英治氏との「実録」問答

実録小説 椎村 *注9

極楽悲憤図——直木三十五と牧逸馬の対話——

笛本

寅

四四一四七

左山英太郎

四八一五八

農民・強盗・格闘資料

X・Y・Z

六〇一六二

実録小説 桂小五郎潜行記

田村栄太郎

六三

国際潜行戦実話 モンテ・カルロの陰謀

(*小説)

早坂 二郎

六四一六七

実録小説 森田節斎

貴司 山治

六八一九四

同人語

岩崎 栄

九五一—〇五

——超事実の事実（海音寺潮五郎）、実録小説と芸術小説（貴司山治）、バラツクの建直しを（戸川貞雄）*注10、面白さの問題（片岡貢）、貴司君の手紙（笛本寅）、古い皮袋（大津恒吉）、実録小説の対話（田村栄太郎）——

一一一一一五

実録文学研究会の趣意書

笛本・片岡

一一六

〔広告〕

*注11

〔裏表紙〕

*注13

注

*注1 発行編集兼印刷人——笛本寅（全号）／発行所——実録文学

研究会（全号）／発売所——文学案内社（全号）／実録文学研究会同人——岩崎栄・海音寺潮五郎・片岡貢・木村毅・貴司山治・笛本寅・田村栄太郎・戸川貞雄・植村清一（全号）、大

津恒吉（一巻一号——二号）、丸尾長頸・高木哲（一巻三号——二巻四号）

*注2

労働雑誌社——『労働雑誌』昭和十年十月号

*注3

文学案内社——『文学案内』昭和十年十月号

*注4

文学案内社——『詩人』創刊予告

*注5 「大分方々から期待されてゐた『実録文学』をいよ／＼創刊する。四角ばつた趣意書は巻末に附した『実録文学研究会趣意書』についてみてもらひたい。たゞ一と言、諸方への御挨拶代りに、ことはつておきたいことは、われく同人は大いに團結してこれから実録文学を世の中へ押し出して行くのであるが、

同人各個人はもと／＼至つて自由な立場に立つてゐる。思想的には——大きくいふと世界観の上では——必ずしも一致してゐるわけではない。又必ずしもそんな必要もないのです。／＼われくはたゞ現在の卑俗低級な大衆文学とたゞかひ、この方面における文学を本来の高さに引き上げる仕事として、実録文学を提唱し、これを社会的に実行するといふ点で、一致してゐるのである。だから同人木村毅は実録文学研究会をガラスの家とよんだが、これは「名言」である。ガラスの家は叩きこはせばこはれる。しかし、使はずにはつておけば鉄の家だとてさびてしまふ。ガラスの家は、使つても、（使はなくても、か？）さびたり、くさつたりしない点では、鉄の家よりも強いのである。——とこれで創刊の挨拶といふことになつたかな。」

*注6 「附記」に「まだ述べるところが多くあるけれど、すでに予定の紙数を超過したから擲筆する、一部分は『文学案内』に掲載するから参照せられたい」とある。

*注7 擲筆——（八月末）

*注8 擲筆——（三五・九・五）。三五頁にレンカ・フォン・ケ

ルバア著・大下晋平訳『ソヴェト刑務所物語』(現代文化社)の広告有り。

*注9 五八頁に貴司山治作・村山知義演出『石田光成・四幕八場』(新協劇団一周年記念大公演・築地小劇場)の広告有り。

*注10 摘筆—(八月末)

*注11 ▼本誌は勿論研究会の機関誌であり同人雑誌ではあるが、実録文学の発展の為には喜んで外部に対して門戸を開かうとするものであるから、志を同じくする人々は凡ゆる意味に於いて本誌なり研究会なりに対し後援を惜しまないやうに御願ひする。特に本文中に掲げてある通り全国の郷土史科研究家については我々は進んで手を差し伸ばし郷土にかくれたる史料や実録を本誌に依つて広く世間に紹介したい。さういふ意味で本誌を利用されることは我々「一字脱字」衷心からの希望である。どしそういふ原稿をお送り願ひたいと思ふ」(片岡)とある。

*注12 ナウカ社—『文学評論』昭和十年十月号・『小林多喜二書簡集』

*注13 貴司山治『戯曲 石田三成』(文学案内社)の広告。

第一卷第二号

昭和十年十一月号 一日發行

〔表紙〕
〔広告〕
〔次〕
〔注1〕
〔注2〕

〔広告〕*注3

歴史とリアリズム (*評論) 片岡 貢 二二八

郷土史家に告ぐ 実録文学研究会 九

実録文学 (*時評) 実録文学読本 (一) 德川幕府の職制と旗本生活 (一) (*評論) *注4

資料 久離除帳とその廃止 白井喬一氏との「実録」問答 笹本 寅 二四一~二八

吉川英治氏への手紙 文壇・実録非実録 田村栄太郎 一二一~二三

一もとの木阿弥、青野季吉武勇譚、判じもの流行、新商売往来— 片岡 貢 二二九

西洋最近の実録文学 (*評論) 木村 稔 三〇一~三七

大前田栄五郎伝—「近世上毛偉人伝より」— (*資料) 田村栄太郎 二二九

千葉さんと実録文学 (*隨想) 木村 稔 三四一~三九

実録監獄部屋物語 (2) (*評論) 大島浪太郎 四三一~四六

現代実録 南硫黄島 (*小説) 戸川 貞雄 四七一~五三

祇園・島原 (*隨筆) 中山 忠温 五四一~五六

辞世伝—「休禅師とレーニン」を解剖する (*評論) *注5 ピエル・ロチの「お菊さん」を解剖する (*評論)

実録小説 意地 永見徳太郎 五七一~六六

実録小説 桂小五郎潜行記 (完結) *注6 海音寺潮五郎 六七一~七九

実録小説 森田節斎 貴司 山治 八〇一~九七

岩崎 栄九 八一~一〇八

同人語

—日記から（戸川貞雄）*注7、武士道の原型（海音寺潮五郎）、「葉

隠」について（笛本寅）—

実録文学研究会の趣意書

編集後記

〔広告〕*注8

〔裏表紙〕*注9

注

*注1 吉川弘文館—宮内省藏版『殉難録稿』

*注2 文学案内社—『文学案内』昭和十年十一月号

*注3 文学案内社—貴司山治『戯曲 石田三成』

*注4 二三頁に『星座』昭和十年十一月号（本間三陽堂書店）の広告有り。

*注5 「末記」として「彭城貞徳、内田栄四郎、中村重嘉、野上豊一郎、渡瀬守太郎、永見豊次郎、永見倉太、松森ゑつ諸氏に教へを受けた点を此處に述べて謝意を表します」とある。

*注6 九七頁に『葉隠』（巻十）より」と題した埋草有り。

*注7 摺筆—（十月三日）

*注8 ナウカ社—『文学評論』昭和十年十一月号

*注9 野淵祐監督『白牡丹』（原作—左八阪、千恵プロ）、田中重雄監督

「喘ぐ白鳥」（原作—加藤武雄、新興キネマ高田プロ）の広告。

—〇九一一一二

〔表紙〕

〔広告〕*注1

〔広告〕*注2

〔目次〕

〔広告〕

〔内表紙〕*注3

ゴルキーと実録文学（*評論）

実録文学読本（二）徳川幕府の職制と旗本生活（二）（*評論）

郷土史家に告ぐ

実録文学（*時評）

実録監獄部屋物語（3）（*評論）*注4

資料 故の刑

乾窓漫筆（*隨筆）*注5

大衆文学時評

一つの実録—「四十年目に判つた名主三人殺し」について—（*評論）*注6

海音寺潮五郎

西 大助

二八一三二

田村栄太郎

一八一一二

田村栄太郎

二二一三三

田村栄太郎

二四一一七

田村栄太郎

四二一六八

田村栄太郎

三九

田村栄太郎

四〇

M生 一一三一一六

一一三一一六

一一三一一七

一一三一一八

一一三一一九

一一三一一一〇

一一三一一一

貴司 山治 二三四

実録文学研究会 一五

田村栄太郎 五一一四

田村栄太郎 一六一一七

田村栄太郎 一八一一二

田村栄太郎 二二一三三

田村栄太郎 二四一一七

田村栄太郎 三九

田村栄太郎 四〇

田村栄太郎 四一

田村栄太郎 四二一六八

田村栄太郎 三九

田村栄太郎 四〇

一一三一一一

神崎 清 六九

木村鑑子小伝の序 島田三郎誌（*資料）K・M生 七〇

実録小説 二葉亭四迷と乃木石林將軍 木村 豊
実録小説 西郷の歯 *注8 戸川 貞雄 八三一八六
実録長篇小説 森田節斎（第二回） *注9 岩崎 栄 八七一九八

同人語

—伝奕史大観（田村栄太郎）、平塚だより（戸川貞雄）*注10、田村栄

太郎の近什「歴史の眞実を衝く」（中山忠温）、寸言（木村豊）—

編集後記

〔広 告〕

〔裏表紙〕 *注11

注

*注1 吉川弘文館—宮内省藏版『殉難録稿』

*注2 文学案内社—徳永直『逆流に立つ男』

*注3 扇カット絵—熊谷登久平

*注4 二二頁に『実録文学』次号予告有り。

*注5 二七頁に『アトロ』昭和十一年一月号（アトロ社）の広告有り。

実録文学（*時評）

資料 時刻

鳶魚翁百話（）（*隨筆）

実録監獄部屋物語四（*評論）

大衆文学時評 *注4

村松梢風氏と「実録」問答

*注7 昭和十年十月二十七日、於新宿中村屋

*注8 摘筆—（十年十一月作）

*注9 目次では第三回と表記。

*注10 摘筆—（十年十一月初旬）

*注11 『添削本位（俳句講座）』（日本俳句研究会）の広告。

第一卷第一号

昭和十一年一月号 一日發行

〔表 紙〕

〔広 告〕 *注1

〔広 告〕

〔広 告〕

〔広 告〕

〔内表紙〕 *注2

新聞小説論—卑俗な、ほんの少々卑俗な— *注3

戸川 貞雄 一一一〇
実録文学研究会 一一

郷土史家に告ぐ

実録文学本誌（三）徳川幕府の職制と旗本生活（三）（*評論）

田村栄太郎 一二一一二

田村栄太郎 一二一一三

田村栄太郎 一二一一三

田村栄太郎 一二一四

西 大助 三四一四五

笹本 寅 二五一一九

大島浪太郎 三〇一三三

西 大助 三四一四五

笹本 寅 四六一五五

大島浪太郎 三〇一三三

西 大助 三四一四五

笹本 寅 五六一五八

伝法谷英丸 五六一五八

潟戸 寅雄 五八一六四

池田孝次郎 六五一一九

乾窓漫筆(三) (*随筆)
実録資料 高崎藩へ、献金願、帶刀御免
実録文学 (*時評)

海音寺潮五郎 六〇一六四

町人と心理学 (*評論)
はつか正月—法廷無罪録の一— (*小説) *注2

田村栄太郎 六八一六七

田村栄太郎 (*評論)
田村栄太郎 六八一六五

田村栄太郎 (*評論)
田村栄太郎 六六一六七

田村栄太郎 (*評論)
田村栄太郎 六六一六八

田村栄太郎 (*評論)
田村栄太郎 六六一六九

田村栄太郎 (*評論)
田村栄太郎 六六一七〇

田村栄太郎 (*評論)
田村栄太郎 六六一七一

田村栄太郎 (*評論)
田村栄太郎 六六一七二

田村栄太郎 (*評論)
田村栄太郎 六六一七三

田村栄太郎 (*評論)
田村栄太郎 六六一七四

田村栄太郎 (*評論)
田村栄太郎 六六一七五

田村栄太郎 (*評論)
田村栄太郎 六六一七六

田村栄太郎 (*評論)
田村栄太郎 六六一七七

田村栄太郎 (*評論)
田村栄太郎 六六一七八

田村栄太郎 (*評論)
田村栄太郎 六六一七九

田村栄太郎 (*評論)
田村栄太郎 六六一八〇

田村栄太郎 (*評論)
田村栄太郎 六六一八一

田村栄太郎 (*評論)
田村栄太郎 六六一八二

田村栄太郎 (*評論)
田村栄太郎 六六一八三

田村栄太郎 (*評論)
田村栄太郎 六六一八四

田村栄太郎 (*評論)
田村栄太郎 六六一八五

田村栄太郎 (*評論)
田村栄太郎 六六一八六

田村栄太郎 (*評論)
田村栄太郎 六六一八七

田村栄太郎 (*評論)
田村栄太郎 六六一八八

田村栄太郎 (*評論)
田村栄太郎 六六一八九

田村栄太郎 (*評論)
田村栄太郎 六六一九〇

田村栄太郎 (*評論)
田村栄太郎 六六一九一

田村栄太郎 (*評論)
田村栄太郎 六六一九二

田村栄太郎 (*評論)
田村栄太郎 六六一九三

田村栄太郎 (*評論)
田村栄太郎 六六一九四

田村栄太郎 (*評論)
田村栄太郎 六六一九五

田村栄太郎 (*評論)
田村栄太郎 六六一九六

期待されたい」とあり、本号をもつて終刊する予定ではなかった様子がうかがえる。

*注5 日本俳句研究会—『添削本位 俳句講座』
稻垣浩監督『大菩薩峠 第二編』(原作—中里介山、日活)の広告。

*注6 稲垣浩監督『大菩薩峠 第二編』(原作—中里介山、日活)の広告。

『実録文学』について

『実録文学』は文学案内社が発行した雑誌であり、文学案内社は他に『文学案内』と『詩人』の二つの雑誌を発行していた。このうち、『文学案内』は一九〇六年に不二出版が復刻刊行し、『詩人』も一九七九年に戦旗復刻版刊行会が復刻刊行している。しかし、『実録文学』は発行部数が少なかつたせいか、復刻のみならず詳らかな先行研究も少ないため、本稿で細目を明らかにした。

『実録文学』の誌名の由来は、プロレタリア文学運動の内部で展開された文学大衆化論を引き継ぎ、貴司山治が転向期に主張した『実録文学論』にもとづいている。貴司は一九三四(昭和九年)一月に『読売新聞』へ連載した『実録文学の提倡』において、「題材の現実性」を顧慮していない大衆文学を「悪傾向の大衆文学」と呼び、それを駆逐するため、未教養な勤労大衆に向けて史実にもとづく「健全な通俗文學」を作り与えることを主張した。『実録文学』の創刊号と第二号に掲載された「実録文学研究会の趣意書」においても、特に動物大衆小説

〔裏表紙〕*注6

注

*注1 吉川弘文館—宮内省蔵版『殉難録』

*注2 摺筆—(一九三六・二・一三)

*注3 摺筆—(十二年・二月作)

*注4 「惜しむらくは、片岡の『塵金つくり』の得られなかつたことである。いよいよクライマックスに達し、片岡トタンに緊張した故である。来月号には間違ひなく掲載されるであらうと思ふ。次号を

を史実を歪曲した「低級卑俗なる大衆小説」と規定し、そのような大衆小説を実録小説の普及によって社会的に排除すべきと主張するなど、貴司の実録文学論を引き継いでいた。

貴司の実録文学論や、それに連なる徳永直との論争については、尾崎秀樹「貴司山治論」（『大衆文学論』勁草書房、一九六五年六月）や伊藤純「プロレタリア文学と貴司山治」（ホームページ『貴司山治資料館』<http://www.kisyamaji.com>）、拙稿『蟹工船』の読めない労働者——貴司山治と徳永直の芸術大衆化論の位相——（『立命館文学』六四号、二〇〇九年一二月）、鳥木圭太「作品紹介[実録文学の提唱]」「転向の時代」（貴司山治研究会編『貴司山治研究』不二出版、二〇一年一月）、内藤由直「貴司山治『維新前夜』と近代の超克——思想戦とアジア解放の幻——」（『フェンスレス』創刊号、二〇一三年三月）などの論考がある。また、実録文学論に呼応して『文学案内』に連載された田村栄太郎の「大衆文学のよみ方」を仔細に検討した海老原豊『文学案内』誌研究(2)——実録文学論と田村栄太郎の「大衆文学のよみかた」（『東北アーバン文化연구』二〇号、二〇一二年三月）、実録文学論の台湾への波及を考察した白春燕「論楊達對 1930 年代日本文藝大眾化論述文學」紹介——芸術化大衆化論争から森鷗外歴史小説受容へ——（『日本近代文学館年誌 資料探索』三二〇〇七年九月）があるのみである。

河野の論考は、『実録文学』創刊に至る経緯を整理し、同人間の理念の幅を指摘するなどたいへん示唆的であるが、実録文学とプロレタリア文学や大衆文学との理論的関連性や差異については、まだ研究の

余地があるように思われる。本稿の公開により、新たな研究が促進されることを期待したい。

本総目次の作成に際しては、公益社団法人部落問題研究所蔵本、伊藤純氏（貴司山治ご子息）ほか個人蔵本を参考した。
(和田 崇)